

便をいじって、部屋をよごす…

⇒タイミングを見てトイレに誘いましょう

とよさと病院 認知症疾患医療センター

【 認知症の人の状態 】

自分が排せつした便をいじって、周辺を汚す行為（ろう便）は家族にとってはとても困ってしまいますが、ご本人はいやがらせや遊んだりしているわけではありません。

便をいじってしまうもっとも多い理由は、「おむつの中に排便したあとの不快感」や「おむつ内に失禁したことを介護者に伝えることができず」、自分でおむつを外してなんとかしようとしたというものです。認知症が進むと、便を便だと理解できず、清潔・不潔の判断力もなくなります。

記憶障害によって、トイレが何をするとところか、排泄の一連の動作が分からなくなっている場合もあります。

そのため、手で便をいじって、それを拭き取るために、壁や床、カーテンなどにこすりつけてしまうのです。また、排便に失敗したときや、トイレで手に便がついてしまったときなどにも、同じ理由から周囲を汚してしまうこともあります。（爪を切っておくと良いでしょう）

トイレの中の便をつかむという行為は、ほとんどありません。

【 対応方法 】

淡々と対応しましょう



①ご本人に悪気はないので、便をいじっているのを見つけたときは怒らずに「すぐきれいにしましょうね」「気づかなくてごめんね」などと優しく声をかけて、まず、体についた汚れを落として、不快感を取り除きましょう。そのうえで、部屋の掃除をします。

②介助すればトイレへの移動が可能なら、できるだけオムツを使わずにトイレで自然排泄できるように環境を整えると、減るかもしれません。改修の種類によっては、介護保険サービスが使えることがあるので、ケアマネジャーに相談してみましょう。

③繰り返し同じ場所を汚すようならば、壁や床に防水シートやはがして捨てられる紙をはっておいたり、汚れてもよい敷物をおいたりして、掃除しやすいよう工夫しましょう。（着脱しやすい衣類に変えてみましょう）

参考文献：認知症のひと家族の会，認知症になった家族との暮らしかた，ナツメ社，2018，P108-109

吉田勝明，認知症は接し方で100%変わる！，IDP出版，2017，P133-134

杉山孝博，認知症の9大法則50症状と対応策，法研，2013，P104-105

2022.6作成

④排泄の始末が自分でできなくなっている段階なら、**排泄の介助が必要**です。薬局などで市販されているお尻拭きを用意して、始末を手伝いましょう。家族が不在の時間帯は、ヘルパーさんをお願いするなど、無理のない方法を考えましょう。

⑤お尻は拭くことはできても、拭いた紙を便器に捨てて流さなければならないことがわからず、部屋に持っていったり、昔は紙が貴重だったため、大事にポケットにしまうとといった場合は、トイレに**専用のごみ箱**を用意し、サンプルの紙を入れておくと、捨ててくれることがあります。捨てることを嫌がる人には、「**ここにしましましょう**」などと何度か伝えてみましょう。

⑥ご本人の排便のリズムをつかんで、**タイミングを見てトイレに誘導**することもひとつの方法です。

参考文献：認知症の人と家族の会、認知症になった家族との暮らしかた、ナツメ社、2018、P108-109

吉田勝明、認知症は接し方で100%変わる！、IDP出版、2017、P133-134

杉山孝博、認知症の9大法則50症状と対応策、法研、2013、P104-105

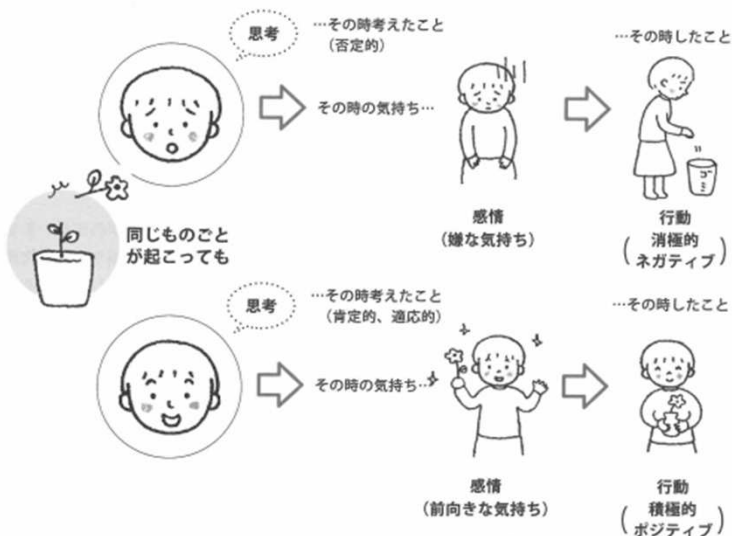
2022.6作成

ケアのコツ…「考え方」が変わると「感情」や「行動」も変わる



家族介護者の怒りとストレスは、最初に浮かんだネガティブな「考え方」が、不快な「感情」と「行動」に影響を与え、その怒りとストレスの引き金になっています。つまり、最初の「考え方」がポジティブになると、その後の「感情」と「行動」が変わってきます。認知症の人の行動を変えることが困難でも、家族介護者の見方、捉え方、考え方をえることで怒りがおさまる、ストレスが軽減することがあります。

図2-1 「考え（思考）」「感情」「行動」の関係



参考文献：福島喜代子、結城千晶、事例で学ぶ認知症の人の家族支援、中央法規、2017、P31、P37-41、P114-120